

安谷屋・石平・瑞慶覧（北中城）

宮城 聰

時 一九六九年九月二十六日 金曜日
場所 安谷屋公民館

氏名 現住所
新垣 善徳
新垣 盛徳
仲村 喜諄
与儀 正行
宮城 勝元
新里 千恵



解説

陰曆八月十五夜、名月の日である。

公民館は、安谷屋部落の西がわ、小高いところにあつて、道から、階段を七つ八つ上る。その上り口の左手に、枯れた松が道へ幹を這うように乗り出している。戦前からの老松だと思われるのに枯れている、惜しいことだ。

登りつめて、立ち止って安谷屋の部落を見廻わした。部落の大半は、濃緑の大樹に被われた連丘に抱かれている。そこには、樹齢数

百年と見える松の大木があちこちにある。それで、ここは戦禍が酷くなかったのかなと思わせる。

公民館の敷地の囲りは、梯梧の大木が並んでいる。幹が大きいので、戦前からの樹でないかと訊いた。戦前の大木から移植したということであつた。勢いよく幹え立ち、花が咲く時は、壮観だろうと思つた。

暴風が、わたしたちの座談会の始まる六時に与那国を襲うとのニュースだったが、雨は降らないし、風も大して強くない、曇天ではある。おそらく名月も顔を出すまいと思つていた。

村座談会で、瑞慶覧部落の壕の悲劇が語られたが、奇蹟的に生き残ることを得た与儀正行さんが出席された。

ここも婦人会の人たちが、公民館を会場として、集まりがあるらしく、一人二人とだんだん集まって、座談会の終るのを待っていた。やはり村座談会で、仲村喜諄さんに著書があつて、戦争についての瑞慶覧の事情もくわしく書いてあるとの話があつたが、仲村さんも出席されたのは幸いだった。

石平、瑞慶覧は、戦争のために、部落が軍用地に取られて、昔の姿を止めない、住民は伝統による心のよりどころを失つて、まことに同情に堪えない、それは村座談会の解説でも述べたが、仲村喜諄さんの著書の昔の図面を見ただけでも、部落の方たちの望郷の念の切なるもののあるのが推察される。

婦人会の人たちに少し無理をして貰つたが、いい頃合いにすみ、わたしたちは三十号線まで歩いて車に乗った。

暴風来を騒がれていた天候だったが、車に乗つたら安谷屋の上空

の雲が切れて、十五夜の月が車窓から見られた。

新垣 善徳（二十歳） 現地召集

わたしたち初年兵は、嘉手納の県立農林学校に集合しました。昭和十九年十月十五日で山部隊への入隊でした。

二か月半の教育を受けて、輜重隊の輓馬部隊にわたしは配属されました。

嘉手納の農林学校がわれわれの隊の本拠でしたが、召集直後に石川の伊波国民学校で十日ほどの訓練を受けて、読谷村の久保に移りました、山の中です。久保は、美里になるかもしれませんが、山ばかりの中に入り込んでいろいろ教育を受けたんです。

久保から嘉手納に戻ると、われわれ輓馬隊は、読谷のマキ原から、壕の枠にする材木の運搬です。どんな大雨が降ろうが風が吹こうがその運搬は休みなしにやらされるんです。読谷村のマキ原は、現在は軍用地に取られています。あの近辺は、松の大木が沢山あつて戦前は大変趣きのあつたところであつたのであります。わたしたちは、伐られている松丸太、おもに松でした。それを積んで運ぶ仕事でしたが、多分その付近一帯の松が伐り倒されたのだと思いません。直径が三十センチ以上もある二間（四米弱）ぐらいの丸太を、前後二人で担いで、輓馬のいるところまで出して、軍隊の大八車に積んで、嘉手納の汽車の駅まで運んで、それを下すと、すぐまた引返して積みに行くんです。松材は荷車いっぱい積みますから、坂を上る時などは、馬といっしょに押したり、それほとにかく重労働

でした。八時に仕事が始まると一日中で、原木運びでない時は食糧の運搬もしたり、難儀とか辛いを通り越して、無我夢中でやらないと、上官が激しいですから、できる限りやらされるんですね。

馬は北海道からも来ていましたが、沖繩の馬が沢山徴発されました。

それから今度は、島尻の陣地構築です。高嶺村の第二与座というところですよ。そこ嘉手納の農林学校と行き通いで、歩いてです。

島尻ではおもに壕掘りですね。三交代で昼夜の差別なくやるんです。わたしたちは輜重隊で六中隊までありましたが、一二三は輓馬隊で四五六の三つの中隊は自動車隊でした。

島尻の壕掘りが先きでなかつたですか。二月に向こうへ行つて、自分の中隊のばかりではなくて、他の中隊の壕の枠を運搬したり、いっしょに掘ったりしましたが、また、嘉手納と第二与座の間の往復も、繰り返し行なわれました。嘉手納から島尻に原木も輸送するわけですよ。

艦砲が始まってからは、昼もいろいろ仕事はありましたが、夜は馬を持って、高嶺の畑に行つて、芋がよくできていそうなところを勝手に掘って、取って来る仕事ですよ。断つて取るのではなくて、よくできていと思うところから、どこかというこなしに取って馬に負わして来るのです。夜ですから、どこの部落の畑かわからなかつたが、与座岳の東がわあたりにも行きました。

艦砲が始まらない前には、具志頭の方へ供出の芋を取りにいったこともありました。

その芋は、中隊の食糧というよりは馬の飼料がおもでした。北海

道の馬は生辛も食いましたが、沖繩の馬は生の辛は食わないので、それを煮てくれました。馬は沖繩からも相当に徴用されていたからな。

輓馬隊というのは自分たちばかりだったでしょう、山部隊の。

わたしたちの隊は、弁ヶ岳の戦に出ましたが、その時、自分は腹を痛めていたので行きませんでした。それは石部隊が全滅したので山部隊が出たんですが、弁ヶ岳で、われわれの中隊は、中隊長をはじめ、わたくしといっしょに召集された初年兵もほとんど全滅でした。

与座では四月いっばい蝸壺作り・陣地構築・馬を養うことに追われ通して、休む暇もない有様でしたが、輻重兵であるわたしたちの隊も、第一線の弁ヶ岳に、ほとんどの人が出たんです。わたしは、下痢が激しくお腹がひどく悪かったので、留守を守って、いろいろやっていたんですね。全滅といっても怪我して与座へ帰って来た人もいましたが、それはごくわずかでした。

戦死した大山の人でわたしの戦友がいました。同じく十九歳で初年兵に取られて仲がよかったです。また農林学校の先生で幹部候補生で、頭もいいという評判の人でして、この方も自分と仲がよかったです。弁ヶ岳で戦死して、帰っては来ませんでした。他府県から来た兵隊は、中隊長、班長、上等兵が、一つの中隊に三、四人いるだけで、ほとんどわれわれの県人で、東村、国頭村あたりからもあちこちから召集された同じ年の初年兵がほとんどでした。首里が崩れてからは、高嶺も艦砲が酷くて、昼は絶対に歩けな

食糧は何もありませんでした。

何という部落かわかりませんが、家は焼き払われて一戸も残っていません。その焼き払われた屋敷の壕に入っていました。そこに二日ぐらいいました。そうしたらそこで銃を構えたアメリカ兵五、六十名に取り巻かれました。それは、六月の二十日だったと憶えています。

手榴弾一つずつ持っているが、それを投げると一斉射撃されると思いましたので、迷っていたら、他県出身兵が両手を高く挙げて飛び出したので、われわれも後について出て行きました。

自分たちがつかまえられる時でしたが、多分他府県出身の日本兵だっただろうと思いますが、砂糖キビ畑の中から、わたくしたち目がけて、手榴弾を投げたんですね。そうしたらアメリカ兵は、自動小銃の一斉射撃で雨霰ですよ。それでも死にはしないで、あちこち相当怪我していましたが捕虜にされました。

島尻に一泊しましたが、煙草を貰っても、一本吸うことはできませんでした。そこへは(豊見城村字仲地か)トラックに乗せられて行っただんですが、何というところなのか、わかりませんが、テントが沢山張られていました。

いっしょになった他府県兵は、一等兵でしたが、正規兵で、自分たちよりは年長者だったでしょう。

それから屋嘉(金武村の石川寄り)に移されて、ハワイに連れて行かれました。帰りは本土の方に船が行って、そこで日本船に乗り換えました。

戦傷については、国から何も貰っていません。船で、調査書を出

い、夜後方へ下り行くのですが、負傷者などは杖をついて、高嶺から伊敷に行って、そこには二、三日いました。

伊敷から戦闘へ行きました。隊は、一中隊二中隊と、もとの隊はなくなつて、怪我していないあちこちの隊(員)がいっしょになつて、指揮は軍医中尉が取つてですね、高い山がありました。あれは摩文仁岳ではなかったですかね、戦闘したところは真栄平です。その戦争でわたくしは、左足の腿を破片でやられました。

この第一線の戦闘でも山部隊はほとんど全滅して、後退しました。残った兵隊がいなくて、解散になりました。

われわれの輻重隊は、一中隊の人員が三十名ぐらいいで、輓馬隊が九十名ぐらいい、自動車隊もやはり九十名ぐらいい。輓馬隊で生き残ったのは、一中隊では本部村出身の渡久地という人ですが今は普天間にいます。この方は、両足貫通の負傷しています。楚南憲和という人も普天間にいましたが、亡くなつて四、五年になります。この方も足に相当の負傷していました。九十人の中、見たのは、三、四人しかいませんでした。自動車隊も合したら百八十人ぐらいいの初年兵でしたが、まあほとんどが戦死してしまつたわけですね。

解散になつてから、米軍に追われて逃げているうちに、同じ沖組人でやはり怪我したものの同志、それに日本兵が一人いっしょになつて、五人で、何とか死ぬのをのがれるために、隠れて歩きました。

食べるものはおもに砂糖キビです。キャベツも畑から取つてかじりました。キャベツは畑に相当に残つてありません。病院などでも、握り飯一つとキャベツを塩でもんだのを与えていましたよ。二、三日カンメンポを食べたことはありましたが、解散の時は、

させられたんですが、そのまま全然それについて何の知らせもありません。ついこの間、普天間の渡久地さんがそのことで見えて話しはしましたが、何も出しませんでした。

家族では弟が護郷隊に行きました。数年で十八になっていました。ですからね、今安富祖に碑文がありますがね、護郷隊で戦死してその碑文に祭られています。

稲嶺 盛 仁 (十五歳) 勤労農兵隊

勤労農兵隊の目的は、最初は兵隊に出ている家に対して勤労奉仕することだったんです。年齢は十五歳から十九歳くらいまで、おもに十五、六歳のものでした。

宿舎は名護の東江にあつて、そこに集合してですね、大体三か月間ほど、教育を受けるんです。教育はほとんど軍隊によつて行われるんです。

わたしは昭和二十年ですね、一月二十五日に向うへ行きましたけれども、教育はほとんど軍隊並みですね、竹槍訓練して見たり、いろいろさせられて、その半面「農業一」についてもやるわけです。主体は、どうしても、兵隊に行くための訓練だったと思えます。

その時の幹部はほとんど兵隊でありましたが、その中に農林学校を卒業した教師もいて、小隊長でした。

三月になつてから、すぐ中頭へ帰つて来て、最初は西原の方、我謝に行つてですね、向うに大体二週間ぐらいいですかね、全員で四十

七、八名でしたが、班ごとに五、六名ずつ別れてですね、各所帯に別れて、毎日勤勞奉仕をやるわけです。起床は七時、一応点呼も取るし軍隊並みです。我謝では、民間の大きな家に宿舎をしました。それから宜野湾に行きましたが、宿舎は、公民館や学校を利用しました。

食事は各部落から供出したものですが、芋ばかりで御飯は全然ありませんでした。芋もお腹の半分くらいですが、そのまま我慢するんですよ。宜野湾にいたところは、宇宜野湾で、宜野湾には二十日ぐらいいました。それから美里に行きましたが、そこでは仕事らしい仕事はやりませんでした。

それから、あまりに空襲や艦砲が激しいもんですから、また山原の方、名護に引返したんです。名護には宿がありましたからね。それで東江では、少しずつ仕事をやりましたがね、上陸前に。

そうしているうちに、空襲が激しいので、山の中に入りました。山の中に入ってからには部隊の方から、一日に一食分だけ湯呑み茶碗のいっぱいぐらいつ貰いました。隊員全部戦争はしないんです、山の中を逃げ廻っているんです。年のいった方たちは弾薬をかつぐために引張り出されましたがね。

隊全員では二百名ぐらい、島尻と中頭のものたちで、国頭の人はいませんでした。

竹槍を持って、逃げ廻ったんですが、主として久志の山でしたね。当時の仲間は、北谷にも一人いますし、浦添にも二人おられます。宜野湾にも一人います。謝刈にも一人いますが、その人たちは最後までいっしょでした。

農兵隊は、自分たちが四期だったようでありました。一年間を区切って、前に三期出たわけです。やはり本拠は名護だったんです。戦争中逃げ廻っている時にもっとも辛かったのは、山の中から荷物を持ち歩いたことだったですね。わたしの中隊長の宮城さんは三、四年前亡くなりましたが、班長の名城伍長は、現在大山で事業をしています。

うちの家族は、父母、兄、兄嫁、兄の子供一人、わたしの姉さんが二人、妹が二人、わたしは十五歳でしたから姉さんたちも結婚はまだしていませんでした。それから弟が一人でした。わたしを合してみんなで十一人家族でした。

家族はみんな自分の壕にいたらしいんですがね。上陸したその日、わたしのすぐ上の姉さんは、艦砲の直撃で壕でやられたらしいんですが、残りは少しづつ怪我してですね、その壕を移ったらしいんですけども、四月一日上陸したその翌朝です、石平の壕にガス弾を打ち込まれて、その時にお父さんが亡くなったらしいんです。それで、お父さんが亡くなったので、びっくりしてあちこち逃げたらしいんですね。そうしたら、その付近でみなやられたらしいんです。お母さんも怪我して長らく中央病院にいたようです。お母さんの怪我は、背後から小銃で右の後肋骨から前がわへ貫通しているのと、それからこっちも（右肩）もやられて、これは傷が大きくへこんでいます。

うちの壕は一番最初に見つかって、上陸してじきアメリカ兵が一度来て、また引返して来て、ガス弾を打ち込んだので、壕から飛び出て逃げたら、後からやられたらしいんですね。

山の中でチハフ（路川フキ）を取って、それに少しづつ米を入れてですね、米は少しづつ持っているわけですがね、チハフの莖も沢山入れて、鍋は大きなのを交代で持って、味噌も少しづつ持っていました。しかしほとんど潮を汲んで来て、それで味をつけるんですね。昼はアメリカさんがいるから、給食用の桶を持って夜行くんです潮汲みに海へ。

隊から逃げるものがいましたよ。食べるものが無いので、また戻って来ますが、帰って来ると、一日中食い物もやらないし、一晚中制裁されて酷い目にあいました。それでも、そういうものが相当におつて酷くやられました。それでは、どうしてそんなに脱走するかっていいますと、団体行動が不自由だし、また逃げて行ったら食い物もあると思っただけですが、却って悪いので隊に帰った方がいいということになるんだと思います。

大隊長は砂川大尉で、現役軍人だったと思います。わたしたちの中隊長は宮城さんという宜野湾の方で、軍隊上りの中尉でした。ほとんど軍隊上りで、ほかに現役の中尉と伍長がおりました。わたしたち勤勞農兵隊も、ほんとは、軍隊精神を植えつけるためだったでしょうね。

六月十日に、解散になりました。それから各自勝手な行動になりましたが、わたしは久志の山にいました。久志では山の近くの畑に芋がありました。それで、その畑の主の仕事を手伝って、芋を貰いました。

六月二十八日に捕虜になりましたが、出て来なければ、明日は山を焼いて、焼き殺すというので出て捕虜取られたわけです。

兄さんは兵隊でなくなりました。やはり沖繩戦です。正規に兵隊に行ってきたのではなかったんです。現地召集といいますが、防衛隊ではなかったんですがね、くわしいことはわかりません。どこでやられたかもわかりませんし、遺骨もさがしたが全然手がかりがないのでわかりませんでした。

生きたのは、お母さんと、わたしと、妹が一人と三人です。十一人の家族の中、九名は亡くなりました。

註、四月一日に自分の家の壕内で、艦砲に当たって姉が一人亡くなる。翌二日に、米軍によってその壕へガス弾を打ち込まれて、父がそのために亡くなった。父が亡くなったので、ガス弾が人間の生命を奪うことがわかって、母と兄嫁をはじめ兄弟たちみんなが壕を飛び出て、逃げた。それを後から米兵によって銃撃され、忽ち五人が射殺された。兄嫁、姉、妹一人、弟一人、兄の子供、この五人である。話している稲嶺さんは当時十五歳だから、射殺された姉も十六、七歳でお母さんと兄嫁以外五人は少年少女で、男は弟が一人であった。無抵抗、何の手向いもしない逃げる婦女子を後から射殺するアメリカ兵のこの行為は、どう解釈すればいいだろう。これは「文明国、合衆国」を「野蠻の国、合衆国」に塗りかえるものではなからうか。

わずか二日の間に、九人の家族中七人が亡くなる。

しかもお母さんはひどい負傷を二か所に負わされ、召集された兄も帰って来なかった。十一人の家族が戦争のために身障者になった母と妹との三人だけが生き残った。この三人家族、重傷の母と、幼い妹と十五歳の少年がどういう苦難を嘗めて、今日に至っ

たか、戦後のきびしい月日をどうして送ったか、きつと言うに言われぬ悲しみと苦しみを堪えなければならなかったことだらう。

仲村喜諄（五十歳） 村食糧増産技手

供出甘藷車が直撃で粉砕されたこと わたしは、村全体の食糧増産技手をしていたので、その時のことについてちょっとお話ししましょう。

供出は、主として甘藷ですが、野菜もいろいろありました。供出したものは、二台のトラックに積んで、カネグスク（？）を通じて、喜舎場を通じて、屋宜原（やきばら）を通じて、嘉手納（かてな）へ行きましたよ。供出物は、おもに嘉手納飛行場へでした。

艦砲は三月二十五日からでしたかね。その艦砲が始まってからでしたが、各部落から供出した甘藷をトラック二台に積んで、飛行場に運ぶ途中、比嘉部落にさしかかった時にですね、飛行機に見つかって、爆弾を落されて、前後して走っていた前のトラックが直撃を受けて小端微塵、メチャメチャに吹っ飛びました。運転台の二人の兵隊も、甘藷も、トラックも。その運転手たちは、北海道出身の一等兵でした。

わたしは後の車に乗っていたが、運転台の二人の兵隊も無事でした。わたしは驚いてキビ畑の中へ入り込んで隠れていて、兵隊たちがあなたは帰れというので、谷間や川をつたって、屋宜原から一晩かかって、瑞慶覧まで帰ったことがありました。それからは、もう

役場へ出勤しませんでした。

瑞慶覧の壕のこと。 瑞慶覧には唐ガマ（ガマは自然洞窟など一般的に穴のこと）といって、二千人、三千人も入る壕があります。しかしこの壕は、雨天の時には雨が漏りますよ。それでそこはよくない。

またつぎに、部落の中に「御神山」（談者の著書『人間郷土記』一九六六年十二月発行にそう書いてあるががむ山、「拝む山」ではないだろうか）というところがありますがね、そこに大きな壕があります。千人ぐらいい入るでしょう。入口から東へ三十メートル西は千メートル以上もある立派な壕です。

註、『人間郷土記』に「名幸塚について」の項目がある。その壕の悲劇、壕の状態などについては、座談会同席の与儀正行さんが体験談で語っている。この著書には、瑞慶覧地元の犠牲者三十八人の氏名が記載されているが、男十三人、女性二十五名、そのほかに北谷村民で、瑞慶覧縁故者が三十七名と、人員数が記載され、計七十五名となっている。

名幸塚に関して 一九五二年八月十一日、終戦後八年目に、ハवाई二世と米軍人が北中城村役所を尋ね、遺留品と遺骨を見つけたと行って来た。役所は早速、名幸塚犠牲者の縁者へ知らせた。遺留品は「キセル」、「煙草入」、「メガネ」、「ランプ」であった。それから、親類およびその関係者が揃って壕内奥「一千米」位の所までくまなく探し、遺骨、遺留品等の全部を収集した。与儀安志氏の書類カバン、印鑑、入歯等（中略）その他北谷の人、津嘉山と書いた奉公袋、印鑑等があり、その家族へ渡した。（中略）故与儀氏

は、永い間喜舎場小学校に於いて教鞭を取られた方で、村民皆の恩師である。退職後は宇民の指導に尽力された。部落向上会長、村会議員、村青英会理事等に就かれ温厚篤実な人柄であった。故仲宗根朝保氏は、沖繩二中（現在の那覇高校）を半途で琉球音楽の熱心家であった。沖繩物産出荷を目的に部落に出荷組合を組織し自から組合長となり部落産業に尽力されたことであった。村会議員にもなった。思いつけば何でもやる人物であった。故与儀龜氏は、筆者と同年生で（中略）部落内でたった二人きりの男、竹馬の友であった。

同年女性は九人もおって、時どき喧嘩した思い出もある。氏は小学校卒業と同時にハワイへ渡航して行った。氏は昭和十五年ハワイより帰り生れ故郷に於いて永住基礎を固めつつある最中、戦争にあり一家全滅のはめにおちいったことは、まことに残念でありお気の毒である。

父と子 わたしの長男と二男は一歳ちがいの年子で、長男は徴兵検査で甲種合格、弟は繰り上げ検査でやはり甲種合格で、昭和十九年の十二月に山部隊工兵隊に入隊しました。同じ中隊に編入されたが、兄は師範学校卒業し、弟は農林学校卒業していますので、兄弟二人幹部候補生の受験資格があるから試験を受けるといっていました。

子供たちが、仲順（同じ北中城村）出身の戦友比嘉清善君が戦病死したので、親もとに班長と三人で送り届けて来たといつて、家へ立ち寄っていたが、「お父さん、人生二十五だ」といって立ち去りました。

戦争がだんだん切迫して来るので、一晩のうちに島尻の高嶺に移

転するという通知が子供たちからあったので、行軍の道すじと時間をたしかめて、北谷村の桑江トンネルに待ち受けて、夜の零時すぎであったが、子供たちにあつたので、いっしょに歩いて、宜野湾村の大山部落まで行って、そこで見送りました。

三月二十一日、彼岸には、彼岸祭りの御馳走を持って、高嶺村役場の壕で子供等に面会しましたが、幹部候補生試験に合格したら熊本の前団に入隊して半年間の教育を受けて、見習士官になりますといっていました。

壕を出て捕虜になる 四月二日の午前十時頃でした。壕の上に米軍が来て、出なさい、出なさいというので、出て見たら、鉄砲持っている。剣持っている。それで、出たらやられると思って、引っ込んで出たりしていた。そうしているとメキシコ兵二人とアメリカ兵二人と四名ぐらい入って来て、早く出なさい、出なさいというんですが、これは鉄砲は持っていないんです。殺さないんだから早く外に出なさい、出なさいというんです。

それで、艦隊が島尻から廻って、砂辺の浜に上陸しておる、そういうことで出たらやられると思っていたが、ああもう死ぬなら外へ出て死のうというので、出て行きましたが人数は六百名ぐらいでしょうね。北谷から玉代勢（たまよせでんしゅう）・伝道（でんどう）・屋宜原の人がいっしょに隠れていましたからね。

それでつかまえられたので、列をなしてですよ、石平の前から北谷の方へ連れて行かれて、これはわれわれどこに引かれて行くのか、船に乗せて、軍艦に連れて行かれるだろうと思っただけです。そうして北谷の浜には二晩いました。

アメリカ軍は上陸して、石平から廻って、安谷屋の後から進んで行くのを現に見ましたよ。それでわれわれは、後方にいるんだから、これは、生命は大丈夫だなど思っただけです。

それからわれわれは、北谷の浜から、野嵩(宜野湾村)に連れて行かれたが、しばらくすると夜は友軍が来ましてね、昼はまたこちらから押し返すというあんばいでしたね。

壕にいた時、捕虜になった時のことを、もう少しくわしく話しますと、最初に、銃剣を持った米兵が三人入口へ来て、出なさいと繰り返しおりましたので、奥へ逃げ込んだんです。瑞慶覧は高いところで、大きな松もありましたが、艦砲で、どんどんやっけて倒しましたよ。それで激しくて外へ出ることはできなかったんですね。そういうことでわたしは若かったので、一番奥に逃げて、そこで死ぬんだと思ったこともあったんです。メキシコ兵二人とアメリカ兵が来た時は、通訳の二世が島尻の人でしたが、早く出なさい、食い物も沢山あります、というので、大体みんなが、これは殺しはしないな、という気持ちになって、出たと思います。

出たら、道の両わきには、銃剣を持った兵隊が立っているんですね。列をなして石平に行った頃は千人以上になっていたのでしようね。北谷に行く時は、前にいったように、海に連れて行って殺すのではないかと、思っただけです。

野嵩に行つて三日くらいしてから、友軍は反撃して、米軍はおしかえされたりしていましたが、一般民が、どんどん撃たれて死ぬものが沢山出ましたから、ここではいかんということで、半分は、具志川村の前原に移動しました。それでわれわれは、真先きに行きま

んぼりと立っていた。

当時米軍通訳官(北中城村島袋出身) 比嘉武次郎君のお蔭で私は一命を助かった。

比嘉君は、現在、米国会衆国務(検査官フイマアラクラブ理事、四十二歳)だが、一九六五年五月十五日付の沖縄タイムスへ、その時のことを掲載している。

原文(タイムス紙)

楚辺の司令部本部でホットしていると、前線の野嵩にいる部隊から、「日本軍のスパイらしい民間人をつかまえた。すぐ来てほしい」との連絡を受け大急ぎで、野嵩の収容所へかけ込んだ。収容所には四十歳位の上品な、紳士が兵に銃を向けられていた。その人の正面にきてことばをかけようとすると、何んとその人は私の尋常五年から、高等二年まで教鞭をとっていた、担任の仲村先生だった。

私の制服を見て、先生もびくくりして、「比嘉君」とひと言立ち上ったが、私のその時の驚きは、ことばでは、いいあわせぬほどでしたが、自分が「アメリカ」軍人だということも忘れ、ただ涙が「ポロポロ」落ちるのには、どうしようもありませんでした。手をにぎりあったまま、しばらく二人は、涙をにじませて、ぼうぜんとして、立ちすくんだまま、収容所の兵隊にその場で、「この人は私の学校の教師だ」といって、先生を引き取り、民間人収容所に送りました。「島の人を救いたい。殺したくない、一人でも多くの人たちを助けたい」と思いつづけていた。「自分にこの瞬間自信があった。自分が居れば、沖縄の人たちに、けつして「ムダ」な死にかたをさせなくてすむ」という、自信がついた。(中略)

した。

北谷収容所の生活 一九四五年(昭和二十年)四月二日午前十一時北谷浜に到着した。各部落より収容された人員実に二、三千人に及んでいた。皆みな顔を見合らし、如何になるかと思案に暮れた。男は二世に連れられて、普天間の商店街や桑江の商店街を駆け廻り、食糧品を蒐集して来て、これを煮て全収容者に配給した。この時のおにぎりは、実に有難い命の食であった。両手におにぎり二つを持ち、涙で過す老若の姿、どうしても忘れ得ない。(中略)二晩の間は、この多くの収容者は、天幕の中で座したまま寝たのである。

野嵩収容所での生活 四月四日午後六時頃北谷収容所より、野嵩収容所に移動して来たら、島尻方面や中部壕より収容された避難民は、四、五千人も居たでしょう。野嵩部落に来て見ると、全戸完全に残っていた。住民は皆南部方面や、国頭方面に避難していた。避難民は思い思いに自分の好きな家を探して居住した。(中略)或る晩、中城村登又出身で七十歳くらいの老人が自分の家まで行って来るといって収容所を出て行ったが、兵隊と間違えられて撃たれて即死したという知らせにより翌日見に行ったら、平安名のおじいさんであった。(中略)

戦争が激しくなり、野嵩収容所も後方班の避難者は、具志川方面へ避難せよとの命令が来た。わたくしたちが野嵩収容所に来てから五日目の四月八日午前十時であった。

その日私は、慢然とあちこち歩き廻っていると、米軍憲兵につかまって「スパイ、スパイ」といって、銃剣をさし向けられて、しよ

首里、浦添で大きな戦闘が起つて来た。婦女子まで「竹やり」を持って、夜襲をして来た。

翌朝立ち寄つて見ると、だいぶ婦女子も加わっていた。

具志川村前原での生活 一九四五年四月八日午前十時、美里村嵩原と、具志川村前原に向つて、米軍輸送部隊の車に乗って移動した。(中略)

或る晩、「クロンボ」が家庭に侵入したので、これを押えて、軍刑に処したこともあった。

昭和二十年八月十五日停戦無条件降伏の宣言が、天皇陛下自ら、宮城高台に立たれたとの報が伝えられ私達國民は一時に、はっとしてうなだれた。

或る日、当間重剛氏(元琉球政府行政主席)重民氏御二人が前原収容所においでになった。それから私は、収容者中大工技術のある方がたを集め照屋様の屋敷内に新しい家を建てて御住居としてあげた。

以上中村さんの『人間郷土記』から引用した。中村さんの談話はスパイ事件で終っているがお話より前掲の方がくわしいので、それを等と抜粋した。

与 儀 正 行 (五十一歳) 字 供 出 係

ちょっと前に出て、立って覗いていたら、何かしらんが、赤いのが上るんですよ。屋宜原から上って行って、また屋宜原から下って行く。また、喜舎場のスーヂ川スーヂ川というところがありますが、そこ

から喜舎場へ向かって上って行くんですよ。アメリカの信号だった

んでしょ。それが上ってからは、艦砲は来ないんですよ。それでこれはたしかに米軍だと考えたわけです。スーヂ川からちよつと行つたところで、友軍の機関銃がカツカツカツ鳴つたわけですよ、ところが、そこで始まつたんですよ。米軍の何というかな、あの大きな、そうそう迫撃砲ですよ。それを打ち込まれて、ほんのちよつとの間です。十四、五分も経つたかと思うと、その辺の友軍の兵隊は、四中隊、五中隊と呼んで逃げるのがわかつたんですよ。これは負けかなと思つたんですよ。

それからわしと、仲宗根というのと、ハワイ婦りの与儀亀の三名が、入口の近くに坐つて話をしていたんですよ。そうすると、わたしたちの壕の上で、トラクターが、まだ聞いたことのない大きな音を立てているんですよ。壕の上をしき均ならしていったんですよ。そこは重機部隊になつていたわけです。

それで、壕の中の前には、その一日は水汲みにも出さないで、用便も中でやつて外に投げ棄てるようにさせることにしていました。

ところが、その重機部隊の連中が、壕の中へ向けて、パンパン四、五発くらいつたわけですね。

その時、落盤している下はちよつとあいていたんですが、その口近くで話しているのをそこから銃を打ち込まれたので、三名はしゃがんでしまつて、壕の中の連中も話声もきこえなかつたわけです。多分米兵は、出てこいといつていたんでしょうね。ところが話す途中に、この英語をしているハワイ婦りの奴が、中の方へ飛び込んで逃げたわけですよ、皆のいるところへ。わたしらは壕の入り口に

んだから、何んとかそれを防がなければと思つたわけです。その中にだんだんわからなくなつて、何かドラがねをがんに打つようにあるが、あとで考えたら、自分の脈博ではなかつたかと思ひます。それからあと全然わからなくなつたんですよ。う、う、うと叩つているので、引きずり出したんですよ。そうして比嘉次郎はやけどで動いてはいるから連れられて行つて、島袋で介抱されて元氣になつてはいるが、自分は動かないものだから壕の前にほつたらかし、行つてしまつたわけです。それで自分が目をさましたのは、まあ五時頃だつたでしょうね。引つ張り出した時にでしょう、あちこちにすり疵はあつたが、それでも動かないのでほつたらかしたんですよ。日が照つていたが蘇鉄の大きいのが壕の前にあつたので、その陰にいたんですよ。目を醒ましたところが、夢を見ているようなあんばいで、しだいに思ひついたので、そうしたら、喉が乾いて我慢できないくらい水が欲しいんですよ。それで下の川に水飲みに行こうと思つて立とうとしたら足が利かんですよ、ころころとずつと下までころろで行つたんですよ。下で十四、五分も坐つておつたんですよ。這つて下の川まで足を引きずつて、水を飲みましたが、あまり乾いているものだから、どれだけ飲んだか、ずいぶん沢山飲んだんですよ。それで水を腹いっぱい飲んだら、すっかり意識が蘇えつて、それから足も動くようになって、体をつかつたら感覚もあることがわかつて、立つて見ました。立つことができたんですよ。

そうすな、もう薄暗くなつていました。それで壕へ戻つて行つて、中を覗こうとしたら、火焰放射機でも打ち込んだのか、熱くて覗いて見ることができないわけです。どうも壕の中はずつと奥まで

いましたから。

それで仲宗根さんとわしと二人残つてしまつて、どうしようか、内へ逃げてあばれようかと耳に口を当ててしやがんでいると、それから今度もまた、こそこそと入つて来たわけです。その時にですよ、仲宗根という人も内の方へ逃げたわけです。あれは前になつていたので、後にいるものは撃たれるからしやがんだわけですよ。

そこには沢山荷物が入れてありました。布団やら、蚊帳やら、米、砂糖樽まで入れてありましたからね、食糧には不自由しなかつたわけです。それでそこにかがんでしまつたら、もう自分ひとりだけ残つていたんですよ。

それで、中に逃げた連中が出て来ないもんだから、とうとう火をつけたわけです。最初は新聞紙ではなかつたですかね、それで布団に火をつけたんですよ。中に入つて来て火をつけるのをわたしはしやがんでいてちゃんとわかつたですよ。

それで荷物に火が広がつて行つたら、その中にもぐつていた比嘉次郎という人が、火傷して、そこであばれたんですよ。それでつかまえられて引き出されたんですよ。

その前に、名幸のおばあさんと、赤ん坊をおばあさんが抱いていたので、赤ん坊を抱いたまま壕から出されました。おばあさんはつかまえられた、殺されるんだと思つたわけです。赤ん坊というのは、この壕の中で生れた子で、壕の中に入つてからそこで二人生れましたよ。

比嘉次郎がつかまえられて、出されるのもわかつたんですよ。煙は次第しだいにやつて来るし、そうして風が煙を吹き込んで来るも

駄目で、焼き払われていることがわかりましたので、壕の中途からつくつてあつた抜け穴から、みんな、たしかに抜け出しているものと自分は計算していました。どうしても、その抜け穴から出るほかはないのですから。

それで自分は、あちこちその辺の山をあるいて見たが、いくらさがし廻つても見つからないので、とうとう先生らが入っている部落の多勢の人が入っている壕に行つたわけです。ところが、そこも誰もいない、荷物はそのまま置いてあるが。

それからもう仕様がなから、とうとう部落へ入つて、自分の本家に行つてですね、そこに坐つておつて、その翌日、立つて小用をしていると、アメリカ兵が後から来てですね、小便をしているのでなかつたら、逃げ出して背後せうろから撃たれていたかもしれません。もう仕様がなから、立つていて、にが笑いで笑つていました。それで来いというのでわたしが近寄つて行こうとしたら、わたしがふらふらしているのを知つたからでしょう、二人来て、両方からわたしの腕を取つてくれるんですよ。二日間飯も食べていないし、酷い目に合つているので弱つていたんですよ。歩きながら煙草をくれて、火もつけてやるが、ちよつと吸つたら、きつくてとても吸うことができません。両腕に手を入れて支えて歩かしながらキャラメルを出してくるんですよ。おかしいなと思ひながらも、半面には、どこかへ連れて行つて殺すのだからという疑い心も出ましたので、それよりはここでやられた方がいいと考へて、豚小屋の前で立ち止つて、撃ちなさいといつたが、わからないから、手真似で、撃ちなさいといつたら、手を拍いて笑つてね、五名だつたが、四名は行つてしま

ったんです。それから腋をかかえて連れて行かれましたが、途中で、水が欲しかったので、井戸の前にある水瓶から水を飲んで飲みうとしたら、兵隊が止めるんです。そうして自分の水筒から飲ましてくれるんですね。どうもおかしいな、この調子なら殺しはしないと、思っただけで、そのまま行ってたんです。

その当時、瑞慶覧の中に、道路に石を積んでガジマルを植えたチンマラという、北谷へも行く三叉路がありました。兵隊はわたしをそこに立たして置いて、行ってしまったんです。そうして直きにジープが来て、島袋へ連れて行っただけです。そうしたら、現在もお元気の喜納先生が、君、何でそんなにおそいのだ、どこか壕にいたのかとおっしゃって、それから喜納先生のお世話になったんです。その後は、わたし自分は何のこともありませんでしたが、壕にいたので助かったのは、名幸のおばあさんとおばさんが抱っこしていた赤ちゃん、比嘉次郎とわたしの四人だけでした。

うちは家内と娘二人その壕に入っていて亡くなった。長男と二男は、現地召集で兵隊に取られて、沖繩の戦争で亡くなって、六人の家族が自分一人だけになってしまいました。

壕にいた妻子は、どこかに壕から出ておるだろうと思っただけ、あちこち捜しましたがどこにもいないし、どうしたかなと思っただけ、アメリカ兵が捜してくれました。それは戦後八年経ってからでした。ずっと奥にいたんです。

その壕は、みんなが入っていたところまでしかないと思っていたんですが、どうして入ったのか、やっと人が抜けられる狭い抜け道があった、そこを抜けたら大きな壕ですな。家族ごとにかたまっただけです。苦勞といえは苦勞ではありましたが、そういったり思ったりしては、日本国民として悪いということまで辛抱して来ました。実際はいろいろ大変きついであります。

日本軍があらゆる設備をし、すべての構築をするためには、それに必要なあらゆる資材と、労力が供出されなければなりません。資材については主として松ですが、竹や、縄・藁・茅までも出しました。

それと同時に、すべての食べ物と労働力、すなわち勤勞奉仕です。

何もかも大変でしたが、まず勤勞奉仕は困りました。男のほとんどが、徴用されるんです。伊江島の飛行場、屋良の飛行場へ何人出せということが村役所から区長に来るんです。

この安谷屋の部落では、一班、二班と分けて五班までありましたが、区長は班長さん方に、勤勞奉仕へ出る人員を割当てるんです。区長と班長は、その人を揃えるのが、なかなか難しいんです。交代して帰っては来るが、帰ったと思ったら、区長は班へ割り当てて、班長といっしょに、人員を村からの割り当てだけ集めて出さねばなりません。ずっと一年近くも前から、絶えず徴用されていますので、帰って来ると仕事が酷くきつかった、待遇が牛馬同様に扱われたという苦情をいいますし、帰って来たばかりなのに、こんなにまた休む暇も、農耕の時日も全然ないと苦情をいいます。ところが、近くの地元の勤勞奉仕の場合などは、男はあちこちに、前に引っ張

いたらよく分った管ですが、あちこち這い上っているものもあるし、察息させられて、苦しさから脱れようとしたのでしようね。うちの家内と娘二人はわかりましたが、遺骨は、あちこち散らばっていたんです。散らばってなかったら、別べつにわかったでしょうが、こっちは余るし、こっちは不足しているしといったあんばいで、いっしょに火葬して分骨しました。

その壕に入っていたのは最初七十五名でした。壕で赤ちゃんが二人生まれましたから七十七名ですね。これから四人だけは出たわけです。この壕には、与儀アンシン先生もいられたが、壕の入口で三人で話し合った時、わざわざお知らせしなかったのです。

その壕が焼かれたのは上陸した翌日のことです。御願森の壕に入っていた人たちが、捕虜されて、石平を通っている時に、真黒い煙が、ずっと空に上って、ナコー壕が燃えていたと聞かされました。

わたしは警察の仕事をやりたいということでも警察に入りました。そこに日本語をよくしゃべるメヨーヘンという軍人がいました。その人を通じて、工兵隊に頼んで、壕へ入ったんですが、何弾というんですかね、薬莖がらがあつたんですが、その工兵隊長はそれを取って見て、頭を振っていました。何か余程、猛烈なものではなかったでしょうか。

わたしは抜け穴から出たものと計算していましたが、反対に奥の方へ入って行って、抜け穴からは抜けられないような激しいもの、窒息というより焼けつく火、火焰放射機などでどうにもならなかったんでしようね。

り出されていますので、女も交じっていいから何人出せと、直接区長に来ます。それで班に割り当てて班長といっしょになって、人を揃えて出すのですが、ふて腐れて脱がれて行かない者も出ますね。そうしたら兵隊の方では、区長の方へ来て当るんですね。人員が足りない、来たものはだらしのないものばかりだと、大変な剣幕で折檻するんです。こっちはどこまでも詫びてすみません。つぎからは気をつけますと許して貰うようになりますが、兵隊は時勢の関係で最初から居丈高に怒って、自分の子供ぐらいの青二才から、顔を殴られたこともありましたがね。

徴用、勤勞奉仕という問題は、区長の立場は板挟みになって、軍と住民との両方から不満や苦情で責められて、辛いことでした。

それから供出のことでありますが、これも大変でした。食糧のすべてのもの、芋や野菜などの食物は一切合財、あとでは、芋のつるまで供出させられました。何班は何がいくらと、組長さんが集めて来ると、軍から集荷所に取りに来て、秤にかけて取るというふうに出せ取らしてました。わたしたちの安谷屋は部落が大きいので、何万斤という集荷があつたわけです。

代金は、豚でも、竹でも、茅の供出にも最初は支払っていましたが、公定相場ですから、住民のがわでは、代金は問題ではなくて、仕方ないから、義務、命令で、いやというわけにいかないからやるのです。おまけに軍の方からは、だんだん供出の命令が多くなるんですが、住民の方では、徴用、勤勞奉仕などに絶えず引つ張り出されていますので、ほとんど農作物の生産に励む時日はなかったもので、民間では、そういうわけで、物が少なくて出すにも出せないとい

う立場にあったんです。自分たちも食べねばならないので、二十斤の芋の供出が割り当てられると、十五斤にしてくれというんですね。それで区長は、班長といっしょになって、無いものも無理して出さしめるようにするわけです。それで、軍からの通達通りに供出できないと、兵隊は、区長に当ります。住民は、兵隊への供出が当り前のようになってはいましたが、もともと満足に農耕ができなかったのだから、出すにも出せないといって困るわけです。住民からは苦情も出ました。供出の場合も両方に扱われて、やはり辛いことでした。

戦争が始まるかなり前からの代金は、払われませんで、全然受け取りませんでした。

戦争が始まってからはですね、いよいよ、西の海岸にはアメリカの軍艦が来た、艦砲がはじまった。しかし艦砲が来て直きまでは、いろいろの行政もやっていますからね。これが一週間つづきましたね。それで部隊長から呼び出されて、こんな高いところにいるんだから、艦砲を見物に行くものもいるかもしれないから、よく注意して見せないようにしなさいということもありましたが、しかし実際見たことのないものですから、わたしさえ、高いところへ行つて、嘉手納の方へどんどんやるのを見ましたが、それは見事なものでありましたよ。

これが四、五日つづいたら、みんな各壕に住っているんですね、班長達も。それで何か用がある場合のために、どこの班長はどこにいると、各班長のいる場所を調べて持っていますので、供出の連絡などをもって、艦砲が激しくなつて身動きもならないという間際まで

われもそうかなと思つて壕から飛び出して、逃げたわけですがね。

もうそれから、ほとんど住民は逃げることはできない。百四、五十名は島尻へ行っているんです。こちらから国頭へ行ったのも若干おりますがね。那覇、首里から来た人たちで、早目に疎開させておるんです。こちらの疎開地は久志村の瀬嵩で、村長もあつちへ行つていたし、安谷屋からも相当に行つていたが、多くの住民はここで捕虜になり、北谷の浜へ行つたという人もおるし、それから金武の中川とかね、あの方面へ連れられて行った人は、苦勞はしたはずだが、比較的は生命に関係が少なかったように思います。島尻へ行った人は、ずいぶん生命を犠牲にしています。われわれも島尻へ行つて、非常に苦勞をしています。

島尻へ行ったのは、みんながいっしょに行ったわけではありません。各自に行っていますね。

わたしの家族は八名でした。おばあさん、わたしの母親、わたしたち夫婦、長男夫婦と長男の子供、それにわたしの、かぞえで十九歳の娘とまだ三つになる男の子という家族構成ですが、嫁とわたしの妻とは、二人とも小さい子供を連れていきますので、何も持てません。娘は満で十七歳でしたから、多少助けになりました。おばあさんは年を取っているの、自分の着換えを持つとのほんの身廻りを持つ程度で、それでも歩くのが大変といつたあんなばいでした。さいわいに長男が兵隊に行かなかつたのが助かりました。わたしと長男と二人で、ある程度荷物は持ちましたが、アメリカ兵が門の先きまで来ていると、逃げて来ている兵隊に驚かされたので、食糧なんかも、ゆつくり準備して持つというわけにいきませんで、大あ

芋は一万余斤とありましたが、すぐ戦争がやって来て、それはお流れになってしまったんです。野菜もその通り兵隊も受け取ることができないで、そのままほったらかしたわけです。

それでそういう状態でありましたので、これではいかんという時になって、各班長にあらゆる面をよく知らして置かねばならないと思つてですね、それで非常召集のある場合においては、壕に住つていてもすぐ集まって来るようにといつて、かねて約束してあつたわけです。それで、上陸前にですね、上陸前といつても二日前ですね、これはこのままではどうもおかしいからと思つて、各班長さん方に連絡をしなければいかんと思つて、暮れてからですが、昼中は艦砲に追われていながら、銅鑼をたたいてですね、この丘で。みな集めてですね、もうこれから自由行動だと。このままあなたがた壕に住つていては危いから、国頭に行こうが、島尻に行こうが、自由行動だ、ということ連絡をするつもりでありましたが、艦砲がどんどんこつちに落ちて来るんですよ、鐘が鳴ると。もうこれから誰も集まりません。まあ、その二、三日前からはどんどん、部落の中にも艦砲が来るんですからね、家が焼ける、うちが吹っ飛ばされるところがあつて、こんな行動を取つたわけですがね。

それからアメリカ軍が上陸した、と騒いでいます。上陸しても、この辺まではそんなに早く来ないだろうと思つて壕に住つていましたが、われわれの壕の前に日本の兵隊がですね、一人逃げて来ています。あなたは兵隊だかどうしたんですかと訊いたら、もうアメリカはこの辺まで来ているから危い、ここにいたら危いから早く逃げた方がいいですよという。こんなことを言うもんだから、われ

わてで、つき当りばつたり持つたんです。

それで島尻へ向かつて行くわけですが、登又を歩いて、それから宜野湾の上にて、そして西原小(浦添村)を越えて、首里を廻つてですね、夜どうし歩きつづけてですね、夜明けに東風平村の宜次・外間へたどりつきました。宜次・外間へなぜ行つたかといふと、そこにはシマ(日本の上方方言で花柳界にいうと広辞苑にもあるが、鑑町の証券街でも、そこにいる人たちは鑑町のことを現在「シマ」といっている。沖縄方言で自分の生れた部落を「シマ」というのは、日本の中古語が沖縄に残っているのではなからうか)の防衛隊が大勢行つていたんですよ。それであれらを頼って行けば、何かいい話も、あるいはいい方法もないものかと思つて行つたんですがね。向こうも大変混乱してですね、住民はまだかなりいましたが、空き家も沢山ありました。そこには、たしか二日いたと思えます。そこは、昼中は物音もないくらいですけど、夜になればですね、素晴らしい人出で、道は人でいっぱい、歩くことも出来ないような、まるでお祭りのような雑踏ですよ。具志頭(村)の安里の方面へみんなが行くんです。夜はアメリカの艦砲や飛行機が来ませんから、夜になるとみんな歩くわけです。

それでみんなが、南の方へ行くので、みんなの行く方がいいだろうといつて、われわれも南へ下つて行つたのです。最初は八重瀬岳の辺へ行つて、あつちの小松林の中を走つてんとあちこち歩き廻つて相当の日数、八重瀬周辺について、それから安里の前の丘、そこから下つて安里に行きましたが、この安里でもあちこち歩き廻つて、かなり長い間、てんてんと隠れまわっていました。

それからギーザパンタの上の小松林の中、そこにはもっとも長い間おりました。ギーザパンタの下の海岸にも一週間ぐらいです。

この八人の家族の食糧ですが、うちから持って来た米はわずかだったんですし、とくに食いつぶしてしまってますね、何にもほかには食べるものがありませんから、夜になって艦砲が止った場合に男だけ出て行って、あちこち歩きまわって、食糧をあさるわけです。芋を手でほじくるのですね、餓も何もないですよ。それで畑へ行って小さなおや指ぐらいのものしかないし、いいところに行き当ると巧くいくけれども、一晩中歩いて、辛い芋もなくて、球菜（キャベツのこと）を持って帰るといふこともありましたが。八人の食糧は、長男と二人で、このようにしてさがして、できるだけ貯えて置くんですがね。ところが日本兵が来て、こっちはあしたは戦場になるのだからすぐこの壕から出なさいというので、あわてふためいて、いそげ、いそげといっただけで、その時に貯えてある食糧も置き忘れて、後は壕もないし、食物もない、といった時もありました。壕はないから、昼は八人の家族が木の陰や、小松林の中などに隠れて、夜になってから食糧さがしに行くのです。芋をあさったり、キビを折って来たり、この食糧をさがして、持って来てみんなに食べさせることは、辛いことであります。

ギーザパンタのですね、海岸に下りてからですが、食糧あさりに行くと、夜中さがし廻っても、芋畑は、何千人という避難民のためにすっかり取りつくされて、芋はないんです。球菜もほとんどなくなつて、キビだって避難民の食糧だから、いいのは残っていない。その残った砂糖キビを折り取って来て、それで母親をはじめ

から玉城(村)へ移されて、百名(同村)方面へ行く人もいるし、佐敷(村)へ送られる人もおるし、われわれは佐敷へ行ったですが、なぜ佐敷へ行ったかといえは、そこからは自分たちの村も見えないから、村と近いところに行こうということでですね。しかし佐敷へ行って悪かったのは、佐敷にいる人は、全部北部の大川(久志村の)へ送られてしまったんです。親戚のおばあさんと小さい子供、男の子で孫ですが、この二人もいっしょになつたので、十人の家族になつたんです。

大川は、ずいぶん大勢の人が行っていたんですがね、病気で死ぬ、栄養失調で死ぬ、マラリアで死ぬ、毎日何十人という人が死んでですね。運ぶ道具がないでしょう。モッコに入れて、足をブラブラ引き摺ってですね、それをちよと死んだ豚を担いで運ぶような塩梅あんばいですからね。担いで行くのは大抵、年寄りと子供ですよ。壮年の者は残っていないんですからね、見るに堪えないものがありましたよ。わたしもずいぶん担ぎましたよ。掘ってある穴へ放り込むんです。自分の近所、隣の者が、互に知り合つて親しくなっていますから、みんなで片付けるわけです。それで、そういうふうには、どんどん倒れるもんだから、成るべく早く他へ移りたいといういろいろ考へて、移ろうとするが、同じ沖繩人の警官(CP)といつて、アメリカ軍が任命した沖繩県人)が出さないんです。それでどうすることもならないんです。それで中城の村長たちは、瀬嵩にいたので、わたしは向こうまで行って、われわれの村民は、帰っているものもある筈だから、早く帰してくれといつたら、近いうちに帰えるようになります、といっていました。そんな折衝をしても結局帰ることは

妻子に食べさせましたが、それで、暗い気持ちになつてしまいました。

こんな遠いところまで来て、こういう飢え死にするよりは、同じく死ぬものであったら自分の村で死ぬ方がよかつた。こんな大勢の家族がここで死んだら、親類縁者にもわからない。自分の村で死んでおけば、一人の子供は本土へ行って帰るのだから帰って来ると、みんなの骨を拾ってくれることもできるんだが、ここで死んで、誰もわからん。こんなに骨折つて、難儀してこんなところまで来て、みじめな死に方をしなければならぬ。

こんなことを考えているとおのずからみんなの顔を見まわすのですがね。もうこれから逃げる先きはないのだからおしまいだ。どんなにもがいても脱のがれる方法はないという気持ちで、一家八人が死ぬものだと思つてですね、その時は何ともいえない、辛い時でしたが、どうもよく話すことができませぬ。昼はこんな滅入つた気持ちですがね、夜になると、また食糧あさりにも男同士で出て行くんです。こうして、その海岸の岩の間に一週間ばかりいたわけです。

その時ですね、アメリカの船が前の海に来て、マイクで、早く出て来なさい。あなたがたは、そこにはいけない。食糧も上げる、着物も上げる。何のためにそこにいるか、というふうには毎朝呼びかけていますがね、また上からビラも落ちていますが、これは嘘ではないかといつて、なかなかみんな出て行かないわけです。

ところが、とうとう食うものがまったくなくなつたので、どうせ死ぬんだから行こうといつて、岩の下から、よ座川(?)のかたわらで、アメリカ兵に迎えられる、具志頭村役所に集められて、それ

できない。

それで、何とか大川から福山の方へ逃げようといつたので、夜逃げして行った人もありましたけれど、それも自分一人なら大丈夫でできました。わたしも自分一人なら逃げて行ったかもしりませぬ。が、年とつた母や子供たちも連れて行くでしょう。それをほつたらかして行くわけにいかない。どうすることもならん。それで、田圃から草をちぎつて来て食つたり、自分で芋を植えて、葉が出たらそれをむしつて食つたり、米の配給はあつたが、ほんの少しずつで、まったく酷い目にありました。

年寄りは、体が持たない。栄養失調になつてとうとうわたしの母はあそこで亡くなりました。六十六歳でした。親戚のおばあさんも、うちの母と前後して亡くなりました。

食べる物もなく大変でしたが、マラリアが、どうしたのか出でですね、十九歳のわたしの娘もそれで死にました。おばあさんを亡くした親戚の男の子もそれで死にました。

わたしたちは、十二月の終りに、安谷屋へ帰ることができたんですがね、ちよと七日目に、三歳のわたしの男の子は死にました。マラリアですね、あつちで罹つていましたから。

一番辛かつたことといつたら、ギーザパンタでの食糧さがしと、あつちで一家全滅に追いつめられたとき、いろいろ苦しんだことでしょうね。大川に移されたのが、何よりも悪いことでした。

新里 千恵(十七歳) 現安谷屋区長夫人

皆さんの苦勞のお話を聞いていますと、わたくしはべつに苦勞し

ていせんので、何を話していいのかわかりませんけれど。石平の裏の山ですけれど、自然壕がありました。そこで捕虜になりました。上陸二日目です。

おじさんがですね、どうしてもアメリカ軍が上陸して来ると、壕から出て騒ぐだろうから、あなたたちはどこへも出ないで、じっとして壕にいろんだよと前から話して聞かされていましたんでね。うちの祖母がですね、ハワイにおりまして、ハワイ帰りといいますが、英語ではなくハワイの言葉ですね、わかっていましたので、はじめに祖母が出て。

うちの父や、もう一所帯入っておいりましたので、そこのおじさんたちが、戸ですね、壕の戸を紐でしばって置いたら入って来ないだろうというんですね。それで紐でしばってありましたが、紐を切って入って来てですね、出なさい、出なさいといって。

二人ばあさんがおりました。殺されるなら年寄りからといまして、うちの祖母がはじめに出たのです。ハワイの言葉で、ハウスとか、チャウチャウというのを向こうではカウカウというそうですね。そしてうちの祖母が、食べ物もあるから出なさいといっているよ、というんですね、若いものはみんな話かないんですよ。それでうちの祖母は苦笑いしてですね、とうとうおどけて踊っているんですがね。

そうしてうちのおばあさんがみんなを出しました。それでガムやチョコレートとかですね、煙草なども貰って、それから普天間の神官前に連れて行かれてですね、向こうで大きな急須が二つ、一つの方はお冷で、一つは今思い出しますと、紅茶でしたか、何か色が

下にも二人妹と弟がおります。

捕虜になった時ですね、日本の兵隊さんからいろいろ聞いていますが、壕の中に入れて、髪も汚れていますし、ことさらに汚なく見せようともしないで、わたくしは涙脆い方ですけれど、壕を出ても涙一つこぼさなかったんです。あの時のことは、今でも珍らしいと思ってくらいであります。

戦争前の軍への協力は、北谷の方で、すずきなど効りて、戦車止めとかつくられてありましたが、その辺へ地雷ですが、普天間の壕から、運びました。重くてですね、とても重かったんです。大勢団体でした。安谷屋で残っている若い女たちは、みんなやりました。石平や瑞慶覧の人たちは、運んだかわかりません。大勢の人でしたが、自分の字の人しかわかりません。

註、同席の与儀正行さん発言。「瑞慶覧も石平も、この辺一帯全部出ています。うちの壕で死んだ娘も運びました。戦車妨害とって道に石垣を二重に積んだり、松の木を横にして組んだりしたところ、石平の下あたりはずっとやってありましたが、その一帯は、地雷を大分埋めたんです」。

ついていたように憶えていますけれども。

その時は、戦車も大砲もすさまじい音を立てていましたけれど、普天間まで歩いて行きました、普天間からまた北谷の浜ですがね、そこまで歩かされて行って、そこに三時間くらいいて、そこで握り飯を買った憶えがあります。

それからまた歩いたんです。石平のところから、今のカジマヤー(十字路)からですね、そこから瑞慶覧へ来て、それから島袋に連れて行かれたんです。荷物も持っていました。

新暦の七月七日、七夕の日に山原(北部)に連れて行かれました。惣慶、漢那の奥の方に、福山といって開墾があるんです。あっちにいたのは大勢の人でありました。

福山でも、そう苦労はしませんでした、うちの父が若かったんです。あの時は「拾い物」といってですね、アメリカ軍が捨ててある罐詰なんかを父がさがしに行くんですが、父といっしょに、弟も棒を持ってついて行きました。わたしは大変な臆病者で、柵から出たら飛び上る方で、どこにも行かなかったんですけれど、それでうちは食べ物には困らなかつたんです。「拾い物」をさがしに行く時は、父と弟は隣り近所の人たちといっしょに、西海岸の安富祖、名嘉真、熱田などへ行くんだと話していました。

家は掘立小屋、それをハーフ屋小といいましたが、床は山竹を取って来て、それでつくって住んでいました。

家族は、おばあさん、父と母、あの時は三十五、六ぐらいでしょうが、今六十歳になりますから。妹がわたくしより三つ下、妹よりも弟は二つ下で、五年生でありました。